

それはメダカ的一种だ

伊藤達也

They are a kind of killifish

ITO Tatsuya

1. はじめに

日本人の英語学習者は、先行詞がもの・動物を表すか人間を表すかに応じて、日英語の人称代名詞が(1)に示される対応を成すと考えるかもしれない。

- (1) a. it : they = それ : それら
b. he : they = 彼 : 彼ら

本稿の目的は、日英語の代名詞を形式的に比較考察することである。より具体的には、itと「それ」が同じように振る舞うとするなら、理論上どのような意味において同じなのか、また、itと「それ」の振る舞いが異なる場合があるなら、それは理論上どのような意味において異なるのかを示す¹。

2節、3節、4節では、先行詞がもの・動物を表す例を取り扱う。5節では、先行詞が人間を表す例を取り扱う。6節はむすびである。

2. 指示代名詞

まず、(2)に示されるような英語の代名詞の例を見てみよう。

- (2) The Empire State Building is in New York. It is tall.

(2)では、itがThe Empire State Buildingに照応している。この照応関係は同一指示のもと

で認可されている。つまり、先行詞 the Empire State Building と代名詞 it がともにエンパイアステートビルを指している。代名詞を自由変項 (free variable) に翻訳すると、(2)の第二文には(3)の意味表示が与えられる。

(3) [tall(x)]

先行詞 The Empire State Building は固有名詞であり、常にエンパイアステートビルを指す。固有名詞の値が常に一定であるのに対し、自由変項の値は語用論的に変わる。(2)の文脈では、x にエンパイアステートビルの値が与えられる。このような用法の代名詞は指示代名詞 (referential pronoun) と呼ばれる。(2)では、先行詞が単数であった。先行詞が複数になると、指示代名詞は they になる。

(4) The Empire State Building and the Chrysler Building are in New York. They are tall.

日本語の指示代名詞の例を見てみよう。

(5) レインボーブリッジは吊り橋だ。それは長い。

(5)では、先行詞「レインボーブリッジ」と代名詞「それ」がともにレインボーブリッジを指している。したがって、「それ」は指示代名詞である。「それ」を自由変項に翻訳すると、(5)の第二文には(6)の意味表示が与えられる。

(6) [long(x)]

先行詞「レインボーブリッジ」は固有名詞なので、レインボーブリッジを指す。(5)の文脈では、自由変項 x にもその値としてレインボーブリッジが与えられる。先行詞が複数になると、指示代名詞は「それら」になる。

(7) レインボーブリッジとベイブリッジは吊り橋だ。それらは長い。

3. Eタイプ代名詞

2節では、代名詞が固有名詞に照応していた。しかし、代名詞は固有名詞以外の表現にも照応することができる。たとえば、(8)では代名詞が量化表現 (quantified expression) の

a chairに照応している。

(8) John made a chair, and Mary broke it.

この照応関係はどのような性質のものであろうか。この例における代名詞は指示代名詞ではありえない。指示代名詞は同一指示のもとで認可される。そのため、指示代名詞は先行詞自体が何かを指すことを前提とする。しかし、先行詞 a chair は量化表現なので、何も指さない。

量化表現を先行詞とする代名詞の用法の一つは束縛代名詞 (bound pronoun) である。もし it が a chair によって束縛されているとすると、(8) は (9) のような意味表示を持つことになるだろう。

(9) $\exists x[\text{chair}(x) \wedge \text{made}(\text{John}, x) \wedge \text{broke}(\text{Mary}, x)]$
 (Johnによって作られ、Maryによって壊された椅子がある。)

しかし、(8)に(9)の意味表示を与えることには問題がある。(8)にはJohnが一つしか椅子を作らなかったという含意があるのに、(9)にはそのような含意がない。このことから、(8)のitを束縛代名詞と考えるのが適切でないことがわかる²。

Evans (1980) は、量化表現を先行詞としていながらそれに束縛されない代名詞をEタイプ代名詞 (E-type pronoun) と呼んでいる。Eタイプ代名詞の扱い方の一つは、それを確定記述 (definite description) の代用と考えることである。例えば、(8)のitはthe table that John madeの代用と考えられる。B. Russellの確定記述の意味論を採用すると、(8)の第二文は(10)のように表わされる。

(10) $\exists x[\text{chair}(x) \wedge \text{made}(\text{John}, x) \wedge \forall y[[\text{chair}(y) \wedge \text{made}(\text{John}, y)] \leftrightarrow [x=y]]] \wedge \text{broke}(\text{Mary}, x)]$
 (ジョンによって作られた唯一の椅子をメアリーが壊した。)

Russellの確定記述の意味論を採用することによって、(10)はジョンが一つしか椅子を作らなかったことを表すことに成功している。先行詞が複数になると、Eタイプ代名詞はtheyになる。

(11) John owns some sheep and Harry vaccinates them in the Spring. (Evans (1980))

(11)のthemはthe sheep that John ownsの代用として働く。したがって、HarryはJohnが

飼っている羊の全てに予防接種をすると解釈される。

日本語のEタイプ代名詞の例を見てみよう。

(12) 太郎は一匹のグッピーを買った。花子はそれを逃がした。

先行詞「一匹のグッピー」が量化表現なので、(12)の「それ」は指示代名詞ではありえない。また、束縛代名詞でもありえない。もし、「それ」が「一匹のグッピー」に束縛されるなら、(12)は(13)の意味表示を持つことになる。

(13) $\exists x[\text{guppy}(x) \wedge \text{bought}(\text{Taro}, x) \wedge \text{set-free}(\text{Hanako}, x)]$

(太郎によって買われ、花子によって逃がされたグッピーが一匹いる。)

しかし、(13)は(12)の意味を正しくとらえていない。(12)によると、太郎はグッピーを一匹しか買ってない。それにもかかわらず、太郎が二匹のグッピーを買い、そのうちの二匹を花子が川に逃がしたとしても、(13)は満たされてしまう³。(12)の「それ」はEタイプ代名詞であり、the guppy that Taro boughtの代用と考えられる。したがって、(12)の第二文は(14)として表わされる。

(14) $\exists x[\text{guppy}(x) \wedge \text{bought}(\text{Taro}, x) \wedge \forall y[[\text{guppy}(y) \wedge \text{bought}(\text{Taro}, y)] \leftrightarrow [x=y]] \wedge \text{set-free}(\text{Hanako}, x)]$

(太郎によって買われた唯一のグッピーを花子は逃がした。)

先行詞が複数になると、Eタイプ代名詞は「それら」になる。

(15) 太郎はたくさんのグッピーを買った。花子はそれらを逃がした。

(15)の「それら」はthe guppies that Taro boughtの代用として働く。したがって、花子は太郎が買ったグッピーの全てを逃がしたと解釈される。

4. 裸名詞と代名詞

(16)では、代名詞themが裸複数形 (bare plural) のdachshundsに照応している。

(16) John saw dachshunds yesterday, and Mary saw them today.

(16)には二つの読みがある。一つの読みは、Johnが昨日見たダックスフンドとMaryが今日見たダックスフンドが同じというものである。この読みでは、themはEタイプ代名詞である。(16)のもう一つの読みは、Johnが昨日見たダックスフンドとMaryが今日見たダックスフンドが異なるというものである。この節では、後者の読みにおける代名詞の用法を考察する。このような代名詞の用法の考察は先行詞である裸複数形がどのように分析されるかに依存する。そこで、まずCarlson (1977)による英語の裸複数形の分析を概略しよう。

Carlsonは三種類の存在物からなる存在論を提案する。三種類の存在物とは、種類(kind)、オブジェクト(object)、ステージ(stage)である。種類はものの種類、オブジェクトはものである。種類とオブジェクトはいっしょになって個体(individual)というクラスを成す。ステージは個体(種類またはオブジェクト)を時間的・空間的に刻んだものである。

たとえば、特定のオブジェクトにはFidoという名前が与えられているかもしれない。我々はそのオブジェクトについて陳述することができる。

(17) Fido is short-legged.

short-leggedのようなオブジェクトレベル述語(object-level predicate)は、オブジェクトを取ることができる。したがって、(17)には(18)の意味表示が与えられる。

(18) short-legged(Fido)

Fidoがオブジェクトを指す固有名詞であるのに対し、裸複数形は種類を指す固有名詞である。たとえば、dachshundsは特定の犬の種類に与えられた名前である。オブジェクトについて陳述することができるように、種類についても陳述することができる。特定のダックスフンド(たとえば、Fido)に3つのサイズがあると言うのは意味を成さない。したがって、(19)はダックスフンドという犬の種類についての陳述として解釈されるべきである。

(19) Dachshunds come in three sizes.

come in three sizesのような種類レベル述語(kind-level predicate)は、dachshundsのような種類に対して使われる。(19)には(20)の意味表示が与えられる。

(20) come-in-three-sizes(dachshund)

裸複数形を種類の固有名詞と考える根拠には、明らかに種類指向である表現で置き換えるこ

とができるという事実がある⁴。

(21) This kind of dog comes in three sizes.

文脈が整えられれば、(21)は(19)と同じ内容を伝えることができる。(21)の主語 *this kind of dog* は明らかに種類指向である。それならば、(19)の主語 *dachshunds* も種類を表していると考えられるべきである。*that kind of dog* は文脈に応じて異なった種類の犬を表す。一方で、裸名詞 *dachshunds* は常にダックスフンドという犬の種類を指す。指すものが一定であることは、固有名詞の特性である。

(19)の *dachshunds* が種類を指すと考えるのはそれほどおかしなことではないかもしれない。しかし、(22a)の第一文に現われている *dachshunds* が種類を指すとは一見考えにくい。しかし、文脈が整えられれば、この例の *dachshunds* も *this kind of dog* で置き換えることができる。

(22) a. John saw dachshunds yesterday. (= (16)の第一文)

b. John saw that kind of dog yesterday.

このことは、*saw* のようなステージレベル述語 (stage level predicate) に取られているときでも、裸複数形 *dachshunds* 自体はダックスフンドという犬の種類を指していることを示している。しかし、Johnが見たのはその種類の具体例である。したがって、ダックスフンドという犬の種類のステージの存在量化が導入されなければならない。Carlsonは、ステージレベル述語がその語彙意味論にステージの存在量化を持っていると論じている。したがって、(22a)は文全体で(23)のように表わされる。

(23) $\exists x^s [R(x, \text{dachshund}) \wedge \text{saw}(\text{John}, x)]$

R関係は個体とそのリアリゼーションを関連付ける。(23)では、種類レベル定項の *dachshund* とステージレベル変項の *x* がR関係によって関連付けられている。したがって、(23)はJohnがダックスフンドという犬の種類の具体例を見たことを表している。⁵

では、(16)の第二文はどのように取り扱われるべきであろうか。

(24) Mary saw them today. (= (16)の第二文)

直感的には、先行詞と代名詞は同じものを表す。Johnが見たダックスフンドとMaryが見たダックスフンドが異なるとしても、Carlsonの存在論を採用すれば、*dachshunds* と *them* が

同じものを表すと考えることができる。つまり、Johnが見た犬の種類とMaryが見た犬の種類は同じである。より厳密には、この照応関係は指示的である。dachshundsは裸複数形なのでダックスフンドという犬の種類を指す。そして、themもその種類の犬を指している。themを自由変項 y に翻訳すると、(24)の第二文には(25)の意味表示が与えられる。

$$(25) \exists x^s [R(x, y^k) \wedge \text{saw}(\text{Mary}, x)]$$

(23)では定項dachshundの値が常にダックスフンドという犬の種類であるのに対し、(24)では変項 y の値が文脈に応じて変わる。もちろん、この文脈ではダックスフンドという犬の種類が与えられる。R関係がステージ変項 x を導入するので、(25)はMaryがダックスフンドという犬の種類の具体例を見たことを表している。このように考えると、同じく指示用法で使われている(4)のtheyと(16)のthemとの違いは、前者がオブジェクトを指しているのに対し、後者が種類を指しているということだけである。

theyが種類を指す指示代名詞として働くことができることを見た。Carlsonは、この点でitの振る舞いが異なることを指摘している。

- (26) a. John saw dachshunds yesterday, and Mary saw them today. (= (16))
 b. John saw a dachshund yesterday, and Mary saw it today.

すでに述べたように、(26a)にはthemが種類を指す指示代名詞として働く読みに加えて、themがEタイプ代名詞として働く読みがある。一方、(26b)にはこのような曖昧性が生じない。itはEタイプ代名詞として働くことはできるが、種類を指す指示代名詞として働くことはできない。したがって、(26b)には、JohnとMaryが同じダックスフンドを見たという読みしかない。たとえ、先行詞が単数形であっても、種類を指す場合にはtheyを使うことができる⁶。

- (27) a. John killed a spider because they are ugly.
 b. John didn't keep a spider because they are ugly. (Krifka et al. (1995))

では、種類を指す指示代名詞の日本語の例を考えてみよう。

- (28) 太郎はグッピーを買った。次郎もそれを買った。

ここでは、Carlsonが英語の裸複数形を種類の固有名詞として分析しているのにならって、日本語の裸名詞を種類の固有名詞として分析することを提案する。実際に稚魚を産むのは雌

だけであるにもかかわらず、(29)が容認可能なのはグッピーというメダカの種類についての陳述だからである。

(29) グッピーは卵胎生だ。

そして、日本語の裸名詞も明らかに種類指向の表現で置き換えられる⁷。

(30) その種類のメダカは卵胎生だ。

(29)と(30)は同じ意味内容を伝えることができる。「その種類のメダカ」は明らかに種類指向の表現である。それならば、裸名詞「グッピー」も種類を表していると考えられるべきである。「卵胎生だ」は種類レベル述語である。したがって、「グッピー」を取ることができる。したがって、(29)は(31)のように翻訳される。

(31) live-bearing(guppy)

一方、「買う」はステージレベル述語なので、(28)の第一文の意味表示(32)にはR関係が導入される。

(32) $\exists x^s [R(x, \text{guppy}) \wedge \text{bought}(\text{Taro}, x)]$

先行詞「グッピー」はグッピーというメダカの種類を指している。したがって、代名詞「それ」もその種類のメダカを指せば、照応関係が成立する。代名詞「それ」を自由変項yに翻訳すると、(28)の第二文には(33)の意味表示が与えられる。

(33) $\exists x^s [R(x, y^k) \wedge \text{bought}(\text{Jiro}, x)]$

変項yにはグッピーというメダカの種類が与えられる。しかし、(33)全体では、次郎が買ったのがそのステージであることを表している。

前節で見た用法 (Eタイプ代名詞) とこの節で見た用法 (種類を指す指示代名詞) は全く異なっており、明確に区別されなければならないことを示す証拠がある。

(34) a. 太郎はグッピーを買った。花子はそれを逃がした。(=(12))

b. 太郎はグッピーを買った。花子はそのグッピーを逃がした。

(35) a. 太郎はグッピーを買った。次郎もそれを買った。(=(28))

- b. 太郎はグッピーを買った。次郎もそのメダカを買った。

(34a) は、Eタイプ代名詞の「それ」を「そのグッピー」で置き換えれば、意味を変えずにパラフレーズすることができる。一方、(35a) は、種類レベルの指示代名詞の「それ」を上意語の「そのメダカ」で置き換えなければ、意味を変えずにパラフレーズすることができない。

種類を指す指示代名詞は、先行詞が複数であっても「それ」であり、「それら」にはならない。

- (36) a. 太郎はグッピーをたくさん買った。次郎もそれを買った。
b. *太郎はグッピーをたくさん買った。次郎もそれらを買った。

種類を指す代名詞が「それら」になるのは、先行詞自体が複数の種類を表しているときだけである。(37)では、「それら」はグッピーとプラティの二種類のメダカを指している。

- (37) 太郎はグッピーとプラティを買った。次郎もそれらを買った。

(37)は、「それら」を「それらの種類のメダカ」や「それらのメダカ」で置き換えることによってパラフレーズすることができる。

- (38) a. 太郎はグッピーとプラティを買った。次郎もそれらの種類のメダカを買った。
b. 太郎はグッピーとプラティを買った。次郎もそれらのメダカを買った。

5. 先行詞が人間を表す代名詞

前節までは、先行詞がもの・動物を表す例を取り扱ってきた。この節では、先行詞が人間を表す例を取り扱う。このような場合、英語では代名詞がheかtheyになる。まず、(39)はオブジェクトレベルの指示代名詞の例である。

- (39) a. John sang, and he danced too.
b. John and Mary sang, and they danced too.

次に、(40)はEタイプ代名詞の例である。

- (40) a. A student sang, and he danced too.

- b. Three students sang, and they danced too.

最後に、(41)は種類レベルの指示代名詞の例である。

- (41) John is looking for lawyers, and Mary is looking for them too.

themが種類を指す指示代名詞として解釈されると、(41)はJohnとMaryが別々の弁護士を探しているという読みになる。themはEタイプ代名詞として解釈されることもできる。この場合、(41)はJohnとMaryが同じ弁護士を探しているという読みになる。一方、himはEタイプ代名詞としてのみ解釈されうる。したがって、(42)には、JohnとMaryが同じ弁護士を探しているという読みしかない。

- (42) John is looking for a lawyer, and Mary is looking for him too.

先行詞が人間を表す場合、日本語では代名詞が「彼」か「彼ら」になる。まず、(43)はオブジェクトレベルの指示代名詞の例である。

- (43) a. 太郎は歌を歌った。彼はダンスも踊った。
b. 太郎と次郎は歌を歌った。彼らはダンスも踊った。

次に、(44)はEタイプ代名詞の例である。

- (44) a. 一人の学生が歌を歌った。彼はダンスも踊った。
b. 三人の学生が歌を歌った。彼らはダンスも踊った。

最後に、「彼」か「彼ら」が種類を指す指示代名詞として解釈されている例を挙げたいのだが、興味深いことに、どちらもそのような解釈を許さない。以下の例では、「彼」や「彼ら」を種類を指す指示代名詞として解釈することは不可能である。

- (45) a. A学会は言語学者を招待した。B学会も彼を招待した。
b. A学会は言語学者を招待した。B学会も彼らを招待した。
(46) a. *太郎は知り合いにヤクザがいる。次郎にも知り合いに彼がいる。
b. *太郎は知り合いにヤクザがいる。次郎にも知り合いに彼らがいる。

これら例における代名詞はEタイプ代名詞としてのみ解釈される。したがって、(45)はA学

会とB学会が同じ言語学者を招待したという読みになる。定 (definite) であるEタイプ代名詞は存在構文に現れられないため、(46a-b) は (47b-c) と同様に容認不可能である。

- (47) a. 彼女には三人の子供がいる。
 b. *彼女にはその子供がいる。
 c. *彼女には全ての子供がいる。

(45)や(46)で「彼」や「彼ら」が種類を指す指示代名詞として解釈されない理由が、そもそも先行詞が種類を指さないからということではない。もの・動物を表す裸名詞と同じように、人間を表す裸名詞も種類を指すと考えられる。

- (48) A学会は言語学者を招待した。B学会もその種類の学者を招待した。
 (49) 太郎は知り合いにヤクザがいる。次郎も知り合いにその種類の人がいる。

(48)が容認可能なのは、「その種類の学者」が裸名詞「言語学者」に適切に照応しているからである。「その種類の学者」は明らかに種類指向である。したがって、「言語学者」も(学者の)種類を指していると考えられなければならない。(49)の容認可能性についても、同じ議論が成り立つ。このことから、(45)や(46)で代名詞が種類を指せないのが代名詞自体の特性によるということが分かる。

6. むすび

これまでの議論をまとめると、以下のようなチャートができる。

- (50) 先行詞がもの・動物を表す場合

	指示代名詞 (オブジェクトレベル)	Eタイプ代名詞	指示代名詞 (種類レベル)
英語	it / they	it / they	they
日本語	それ/それら	それ/それら	それ

- (51) 先行詞が人を表す場合

	指示代名詞 (オブジェクトレベル)	Eタイプ代名詞	指示代名詞 (種類レベル)
英語	he / they	he / they	they
日本語	彼/彼ら	彼/彼ら	

日英語ともに、一つの代名詞が理論的に異なった複数の用法を持っていることは興味深い事実である。しかし、これらの用法に関して、日英語の代名詞はパラレルではない。代名詞がオブジェクトを指す指示代名詞として働くとき、そしてEタイプ代名詞として働くとき、(1)に示される対応、つまり $it : they = 「それ」 : 「それら」$ が成り立つ。一方で、種類を指す指示代名詞として働くとき、この対応は破綻する。この用法では、英語では複数の $they$ が、日本語では単数の「それ」が用いられる。

(52) a. John has guppies. They are a kind of killifish.

b. 太郎はグッピーを飼っている。それはメダカ的一种だ。

また、代名詞の用法に関して注目すべき点が日本語自体に見つかる。先行詞がもの・動物を表す場合、日本語では単数代名詞「それ」が種類を指す指示代名詞として働くことができる。それならば、先行詞が人間を表す場合、同じく単数代名詞の「彼」が種類を指す指示代名詞として働くことができると期待される。しかし、「彼」はそのようには解釈されない。(複数代名詞「彼ら」も種類を指す指示代名詞として働くことはできない。)日本語に人間の種類を指す代名詞がないことは、日英語の代名詞を体系的に考察することによって初めて見えるようになる空白である。

注

本稿は日本英語英文学会第18回研究発表会(2008)における発表内容を修正し、発展させたものである。発表会において貴重なご意見をくださった方々にお礼を申し上げたい。

¹ 本稿では、議論を代名詞が照応的に使われている例に限定する。したがって、代名詞が直示的に使われている例は取り扱われない。また、先行詞となる名詞は全て可算名詞である。

² 実際、 it は束縛代名詞として解釈されるべき構造上の条件を満たしていない。代名詞が数量詞によって束縛されるためには、数量詞によってc統御(c-command)されていなければならない。たとえば、(i)ではevery dogが its をc統御する。そのため、 its はevery dogに束縛される解釈を持つ。

(i) Every dog_i likes its_i tail.

ところが、(ii)ではevery dogが its をc統御しない。そのため、(ii)では its はeverydogに束縛される解釈を持たない。

(ii) *A cat that every dog_i knows likes its_i tail.

(8)に戻って、代名詞 it がa tableに束縛されるための構造上の条件を満たしているか考えてみよう。この例では、量化表現a tableと代名詞 it がそもそも別々の文に現われている。そのため、a tableは it をc統御しない。したがって、 it はa tableに束縛される解釈を持たない。

³ 実際、「それ」は束縛代名詞として解釈されるための構造上の条件を満たしていない。つまり、「一匹のグッピー」が「それ」をc統御していない。

- ⁴ 裸複数形を種類の固有名詞と考えるさらなる証拠については、Carlson (1977) を参照のこと。
- ⁵ ダックスフンドを見たのは、Johnのステージである。したがって、より精密には、(23)は (i) のように表わされるべきである。

(i) $\exists x^s \exists y^s [R(x, \text{dachshund}) \wedge R(y, \text{John}) \wedge \text{saw}(y, x)]$

- ⁶ (26b) では述語がステージレベル述語である。述語が種類レベル述語になると (また、述語がステージレベル述語であっても、総称文になると)、itも種類を表すことができる。

(i) John found a dodo, although it was believed to be extinct. (Krifka et al. (1995))

しかし、述語が種類レベル述語であっても、先行詞が単数形でなければ、itは種類を表すことができない。

(ii) John found some dodos although they were /*it is believed to be extinct. (Krifka et al. (1995))

このように、先行詞と数が違っていても種類を表せる they に比べ、it の種類への指示は制限が厳しい。

- ⁷ 裸名詞を種類の固有名詞と考えるさらなる証拠については、Ito (印刷中) を参照のこと。

参考文献

- Carlson, Gregory (1977) Reference to kinds in English. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Evans, Gareth (1980) Pronouns. *Linguistic Inquiry* 11: 337-362.
- Ito, Tatsuya (印刷中) Bare nouns in Japanese and Korean 『日本英語英文学 : 18』
- Krifka, Manfred, Francis Jeffrey Pelletier, Gregory Carlson, Alice ter Meulen, Godehard Link, and Gennaro Chierchia (1995) Genericity: An introduction. In: Gregory Carlson and Francis Jeffrey Pelletie (eds.) *The generic book*, 1-124. Chicago: University of Chicago Press.

(いとう たつや 本学非常勤講師)

